橋の下

フレデリック・ブウテ
森鷗外訳

一本腕は橋の下に来て、まず体に一面に食っ附いた雪を振り落した。川の岸が、潰(けが)されたことのない処女の純潔に譬(たと)えてもいいように、真っ白くなっているので、橋の穹窿(きゅうりゅう)の下は一層暗く見えた。しかしほどなく目が闇に馴れた。数日前から夜ごとに来て寝る穴が、幸にまだ誰(たれ)にも手を附けられずにいると云うことが、ただ一目見て分かった。古い車台を天井にして、大きい導管二つを左右の壁にした穴である。

雪を振り落してから、一本腕はぼろぼろになった上着と、だぶだぶして体に合わない胴着との控鈕(ボタン)をはずした。その下には襦袢(じゅばん)の代りに、よごれたトリコオの

ジャケツを着込んでいる。控鈕をはずしてから、一本腕は今一本の腕を露した。この男は自分の目的を遂げるために必要な時だけ、一本腕になっているのである。さて露した腕を、それまでぶらりと垂れていた片袖に通して、一方の導管に腰を掛けた。そして隠しからパンを一切と、腸詰を一塊と、古い薬瓶に入れた葡萄酒とを取出して、晩食をしはじめた。

　この時自分のいる所から余り遠くない所に、鈍い、鼾（いびき）のような声がし出したので、一本腕は頭をその方角に振り向けた。

「おや。なんだ。爺（じ）いさん。そいつあいけねえぜ。」

一本腕が、口に一ぱい物を頬張りながら云った。

一言の返事もせずに、地びたから身を起したのは、痩せ衰えた爺いさんである。白い鬚（ひげ）がよごれている。頭巾の附いた、鼠色の外套の長いのをはおっているが、それが穴だらけになっている。爺いさんはパンと腸詰とを、物欲しげにじっと見ている。

一本腕は何一つ分けてやろうともせずに、口の中の物をゆっくり丁寧に噬（か）んでいる。

爺いさんは穹窿の下を、二三歩出口まで歩いて行って、じっと外を見ている。雪は絶間なく渦を巻いて地の上と水の上とに落ちる。その落ちるのが余り密（こまか）な

ので、遠い所の街灯の火が蔽（おお）われて見えない。

爺いさんが背後（うしろ）を振り返った時には、一本腕はもう晩食をしまっていた。一本腕はナイフと瓶とを隠しにしまった。そしてやっと人づきあいのいい人間になった。「なんと云う天気だい。たまらないなあ。」

爺いさんは黙って少し離れた所に腰を掛けた。

一本腕が語り続けた。「糞（くそ）。冬になりゃあ、こんな天気になるのは知れているのだ。出掛けさえしなけりゃあいいのだ。おれの靴は水が染みて海綿のようになってけつかる。」こう言い掛けて相手を見た。

爺いさんは膝の上に手を組んで、その上に頭を低く

垂れている。
一本腕はさらに語り続けた。「いやはや。まるで貧乏神そっくりと云う風をしているなあ。きょうは貰いがなかったのかい。おれだっておめえと同じ事だ。まずい商売だよ。競争者が多過ぎるのだ。お得意の方で、もう追っ附かなくなっている。おれなんぞはいろんな事をやってみた。恥かしくて人に手を出すことの出来ない奴の真似をして、上等の料理屋や旨(うま)い物店の硝子(ガラス)窓の外に立っていたこともある。駄目だ。中にいる奴は、そんな事には構わねえ。外に物欲しげな人間が見ているのを、振り返ってもみずに、面白げに飲んだり

食ったりしゃあがる。おれは癲癇病みもやってみた。口にシャボンを一切入れて、脣から泡を吹くのだ。ところが真に受ける奴は一人も無い。馬鹿にして笑ってけつかる。それにいつでも生憎手近に巡査がいて、おれの頸を攫んで引っ立てて行きゃあがった。それから盲もやってみた。する事の無い職人の真似もしてみた。皆駄目だ。も一つ足なしになって尻でいざると云うのがあるが、爺いさん、あれはおめえやらないがいいぜ。第一道具がいる。それに馬鹿に骨が折れて、脚が引っ吊って来る。まあ、やっぱり手を出して一文貰うか、パンでも貰うかするんだなあ。おれはこのごろ

時たま一本腕をやる。きょうなんぞもやったのだ。随分骨が折れて、それほどの役には立たねえ。きまって出ている場所と、きまってくれるお得意とがなけりゃあ、この商売は駄目だ。どうせ貧乏人は皆くたばるのだ。皆そう云っていらあ。ひどい奴等だよ、金持と云う奴等は。」

「なぜぬすっとをしない。」爺いさんが荒々しい声で云った。

この詞（ことば）は一本腕の癪（しゃく）に障った。「なに。ぬすっとだ。口で言うのは造做（ぞうさ）はないや。だが何を盗むのだ。誰の物を盗むのだ。盗むにはいろいろ道具もいるし、

それに折も見計わなくちゃならない。修行しなくちゃ出来ない商売だ。そればかりじゃないや。第一おれには不気味で出来ねえ。実は小さい時おれに盗みを教え込もうとした奴があったのだ。だが、どうも不気味だよ。そうは云うものの、おめえ何か旨い為事（しごと）があるのなら、おれだって一口乗らねえにも限らねえ。やさしい為事だなあ。ちょいとしゃがめば、ちょいと手に攫（つか）めると云う為事で、あぶなげのないのでなくちゃ厭だ。そう云う旨い為事があるのかい。福の神の髻（たぶさ）を攫んで放さないと云う為事だ。どうかすると、おめえそんなのを一週間に一度ずつこっそりやるのかも知れねえ

が。」一本腕はこう云って、顔をくしゃくしゃにして笑った。

爺いさんは真面目に相手の顔を見返して、腰を屈めて近寄った。そして囁（ささや）いた。「おれは盗んだのだ。何百万と云う貨物（しろもの）を盗んだ。おれはミリオネエルだ。そのくせかつえ死ななくてはならないのだ。」

一本腕は目を大きく睜（みは）った。そして大声を出して笑った。「ミリオネエルだ。あの、おめえがか。して見ると、珍らしいミリオネエルの変物だなあ。まあ、いいから来て寝ろ。おれの場所を半分分けてやる。ぴったり食っ附いて寝ると、お互に暖かでいい。ミリ

オネエルはよく出来たな。」

爺いさんは一本腕の臂(ひじ)を攫んだ。「まあ、黙って聞け。おれがおぬしに見せてやる。おれの宝物を見せるのだ。世界に類の無い宝物だ。」

一本腕は爺いさんの手を振り放して一歩退いた。

「途方もねえ。気違じゃねえかしら。」

爺いさんはそれには構わずに、靴をぬぎはじめた。右の足には黄革の半靴を穿(は)いている。左の足には磨り切れた、控鈕(ボタン)留の漆塗の長靴を穿いている。その左の方を脱いで、冷たいのも感ぜぬらしく、素足を石畳の上に載せた。それから靴の中底を引き出した。それか

ら靴の踵に塡めてある、きたない綿を引き出した。綿には何やらくるんである。それを左の手に持って、爺いさんは靴を穿いた。そして身を起した。

「見ろよ」と云いながら、爺いさんは棒立ちに立って、右の手を外套の隠しに入れて、左の手を高くさし伸べた。

一本腕はあっけに取られて見ている。

爺いさんは左の手を開いた。指の間に小さい物を挟んでいる。不思議にも、その小さい物が、この闇夜に漏れて来る一切の光明を、ことごとく吸収して、またことごとく反射するようである。

爺いさんは云った。「なんだか知っているかい。これは青金剛石（ダイアモンド）と云う物だ。世界に二つと無い物で、もう盗まれてから大ぶの年が立つ。それを盗んだのはおれだ。世界中捜しても知れない。おれが持っている。おれが盗んだのだ。なんでもふいと盗んだのだ。その時の事はもう精（くわ）しくは知っていない。忘れてしまった。とにかくその青金剛石はおれが持っている。世界に二つとない正真正銘の青金剛石だ。世界中捜しても見附からないはずだ。乞食の靴の中に這入っている。誰にだって分からなかろう。誰にだってなあ。ははは。何百万と云う貨物（しろもの）が靴の中にあるのだ。」

一本腕は無意識に手をさし伸べて、爺いさんの左の手に飛び附こうとした。

「手を引っ込めろ。」爺いさんはこう云って、一歩退いた。そして左の手を背後（うしろ）へ引いて、右の手を隠しから出した。きらきらと光る小刀を持っていたのである。裸刃（はだかみ）で。「手を引っ込めぬと、命が無いぞ。そこで今云ったとおり、おれが盗んでいるのだ。おぬし手なんぞを出して、どうしようと云うのだ。馬鹿奴（め）。取って売るつもりか。売るにしても誰に売る。この宝は持っていて、かつえて死ぬより外（ほか）無いのだ。」

「馬鹿げているじゃないか。小さく切らせればいい。

そんな為事を知ったものがあるのだ。おれならそう云う奴をどうにかして捜し出す。もしおめえの云うような値打の物なら、二人で生涯どんな楽な暮らしでも出来るのだ。どれ、もう一遍おれに見せねえ。」

爺いさんは目を光らせた。「なに、おれの宝石を切るのだと。そんな事が出来るものか。それは誰にも出来ぬ。第一おれが不承知だ。こんな美しい物を。これはおれの物だ。誰にも指もささせぬ。おれが大事にしている。側に寄るな。寄るとあぶないぞ。」手には小刀が光っている。

爺いさんはまた二三歩退いた。そして手早く宝石を

靴の中に入れて、靴を穿いた。それから一言も言わずに、その場を立ち去った。

一本腕は追い掛けて組み止めようとした。しかしふと気を換えて罷(や)めた。そして爺いさんの後姿を見送っているうちに、気が落ち着いた。一本腕は肩を聳(そびや)かした。「馬鹿爺い奴(め)。どこへでも往きやあがれ。いずれ四文もしないガラス玉か何かだろう。あんな手品に乗って気を揉んだのは、馬鹿だった。」こう云って一本腕はいつもの穴にもぐり込んだ。

爺いさんは鼠色の影のようにその場を立ち去った。そして間もなく雪に全身を包まれて、外の寝所を捜し

に往く。深い雪を踏む、静かなさぐり足が、足音は立てない。破れた靴の綻(ほころ)びからは、雪が染み込む。

底本：「諸国物語（上）」ちくま文庫、筑摩書房
１９９１（平成３）年12月４日第1刷発行
底本の親本：「鷗外全集」岩波書店
１９７１（昭和46）年11月～１９７５（昭和50）年６月
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００７年12月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。